

如來ト云、出御之儀式、入院又ハ年始歳末以下之時ニハ相替也。略中藥師如來被唱時、自寺家燒香侍者行者總門マデ參、從山門始テ佛殿、土地堂、祖師堂、觀音殿、御燒香悉過テ後、於方丈點心御時ヨリ、往寺以下御相伴ニ被參、

〔沙石集〕十得佛教之宗旨人事

金剛王院ノ僧正實賢、年々ケテ後佛法ノ心地アル弟子ニ、物語セラレケルハ、略中武州ノ或寺ノ長老、宋朝ニワタリテ、彼寺ノ行儀ヲウツシヲコナフ故ニ、十三人ノ僧ヲ、十二人ハ寺官ニサシテ、點心イトナミケル時、一人ノ僧ヲバ、堂僧トテ點心ヲクハセズ、大ナル寺ニ堂僧オホカル故ニ、官人バカリニ點心スルヲ、マホル格式オコガマシクコソ、此事ハ宋朝マデ聞タル勝事也、

〔貞和二年天龍寺臨幸私記〕貞和二年二月十七日、太上天皇持明院殿臨幸當山、略中當獻點心時、往

持退出、昨夜雨降、明未晴、因茲臨幸遲矣、住持豫齋、獻點心後雨晴、幸龍門亭、其餘皆用圓座、

〔碧山日錄〕寬巳二年正三月十一日壬子、平旦有點心之供、供畢開妙典頓書之會、寬午三年正正月五

日辛丑、赴永安之招、有點心之設、二月一日丙寅、黎明有點心之供、相會者三十餘員、皆南禪相國之徒也、

〔大館常興日記〕天文八年六月十五日、南御所瑞花院殿より文在之、今日しゆ光院殿廿五年御佛事、仍てんしん御とき等もたせ被下也、各めされ候。略中下

〔親俊日記〕天文十一年三月十八日己亥、妙音寺へ罷也、點心、

〔齋藤親基日記〕文正元年六月廿四日、普廣院殿義教御年忌、御成如常、評定衆右筆方如先々參候、

於藏集齋點心在之、評定衆點心計也、

〔三好筑前守義長朝臣亭江御成之記〕一三月四年永祿卅日未御成

一右京兆の供衆は、於御座敷可有見物之由被申之、又諸侯衆被申分は、京兆衆と同座無覺悟先例